

「環境理想都市モデルプロジェクト」 輝ける都市から、大地に根をはった豊かな都市へ

中村 勉(建築家・ものづくり大学教授)

(1)戦略の基本理念、視点等

<全体主旨> 日本の都市は歴史的、景観的、生活環境としても美しい風景をもっている。しかし、温暖化問題に対する民生(生活・業務)部門における CO2 排出量削減は十分に進んでいない。都市のもつ伝統と独自の魅力を活かしながら、環境面においてもエリア全体を総合的に改修し、理想的な都市をつくるシミュレーションを行い、内外から一つの文明モデルとされるような美しい環境理想都市づくりを提案する。

1:環境建築総合技術による CO2 50%削減へ:

日本の建築における環境技術は、環境要素技術を建物に付置する時代から、空間デザインと環境工学が融合した総合化技術を普及する第五世代に入った。断熱・気密・開口部断熱・日射遮蔽・蓄熱等の環境基本性能を見直し、自然・廃棄・バイオエネルギーを導入することによって、CO2 50%以上を削減する次世代の建物とすることができるといえる。これにかかるコストは GDP の 1%程度という試算もある(国立環境研究所他「2050 日本低炭素社会シナリオ」)。しかし実践は、適切な法的規制が十分でないことに加え、国民一人一人の危機感や、環境性能アップへの認識の欠如により足踏み状態である。公共施設の率先実行施策、および、民間企業施設、従業員住宅、地域個人消費者に対する、自発的なエコ改修を促す教育とインセンティブ政策を早急に推進する必要がある。

2:温暖化対策を都市に広げ美しい都市をつくる:

さらにその総合化は単体の建築だけでなく、地区、地域、都市へと広がりをもって総合化されることが求められる。地球温暖化対策に対する面的なひろがり、都市全体への広がりや様々な都市を構成する各層の総合的対策には至っていない。次世代はこの環境都市づくりに焦点をあてるべきである。

公共道路は自動車道の整備に主眼がおかれ、人間のための景観・空間デザインは思うように進んでいない。歩行者・自転車空間の充実やトラムカーの復活をまちづくりに取り入れ、車に依存する度合いの少ない都市をつくらなければならない。

都心部での大規模開発においても、不動産価値を重視する経済優先の考えから、公共価値を重視し、都市全体を見通すアーバンデザインの視点で都市を再生しなければならない。個々の建物への総合的な温暖化対策改修施策と同時に、外部空間の公共意識を重視し、歩行者配慮を優先させ、歴史を生かした美しいまちづくりが必要である。美しい都市は景観だけでなく、見えないところの自然、環境の本質もしっかり守られた、人々が暮らしやすいまちでなければならない。

3:2050年の都市像からのバックキャスト:

都市イメージや環境方策を考えると、現在を基軸にしたフォーキャストの方法では現在までのように数%の CO2 削減も難しい。むしろ 2050 年の将来に民生部門 CO2 50%削減、地域産地域利用(促進)等の理想社会像を想定し、それを実現するための方策を考えると、バックキャストの方法により大きな飛躍をもたらすことができる。この方法によって、温暖化対策を阻害している、制度・法・税体系等の要因の変質が求められ、ライフスタイルとともに循環・自然エネルギーの利用、無暖房無冷房住宅、ゼロエミッション、パーマカルチャー等が現実的になる。

4:CO2 排出量削減と地域産物地域内利用(広義の物質循環):

都市・地域を対象としたエリアとしての CO2 削減の取り組みはこれまで行われなかった。この戦略では全国 10 箇所程度のモデル都市・地域を設定し、総合的・具体的にインフラ・都市・住まい空間の全てについて、達成目標(CO2 50%削減)を実行しうる方法を検討する。都市インフラや社会システムについても検討することで、阻害要因を認識し、それに変わる新たな方策を提案し、理想的な環境都市へのシミュレーションモデルをつくることのできる。

地域産物地域内利用の促進と鉄道利用など輸送手段の見直しなども CO2 排出削減に効果が期待できる。

また、環境問題に焦点をあてることにより、密集市街地の活性化の問題に対しても、道路拡幅、共同化とは違う方策が開けてくる。

5:地方公共団体職員への環境教育と自治体の率先実行:

殆どの県・政令指定都市では環境基本計画を作成しているが、市区町村ではまだ20%強にとどまり、断熱などの基本性能を改善してCO2排出量を削減した実施例は少ない。環境基本計画の点検調査で、「環境を守ると生活が豊かになる」と回答するなど、子どものほうが環境意識が高いことが報告されている。

既成行政システムも環境の視点から見直し、税・法体系や、単年度主義の財政制度、縦割り組織による行政制度、既得権保持の体質などと同時に、自治体職員の受身的、義務的な対応を変革するなど、自治体が率先実行して総合的方策を行い、社会へも変革を促すことで、大きくCO2排出量を削減することができる。

6:市民参加による市民合意形成を前提としたと専門家によるシミュレーション:

戦略実行するに際し、可能な限り参加型で市民の主体性を尊重した方法で行うことが必要である。同時に、考えられる知を総動員して構想立案チームをつくり、現状の環境的検証、改修方法発案、全体改修構想立案、コスト計画、効果分析などを行い、同時に制度、法体系、税制、組織などに障害要因を見つけ、それを除外した数種類のシミュレーションモデルをつくり、市民の合意形成を図りながら実施に進める必要がある。試行としてモデルを示す初期段階では、専門家による環境理想都市シミュレーションをつくり、その後、市民合意形成を慎重に図る段階に移る。

7:2011年UIA(国際建築家連合)東京大会へ(テーマ「建築の新しい地平へー2050年の人間環境再生にむけてー」(仮)):

2011年に東京で10,000人規模の国際建築家連合の大会がオールジャパン態勢で開かれる。2008年の世界サミットにおいて、この環境理想都市モデルプロジェクトを世界中でも同じテーマで研究することを提案し、この成果を2011年のUIA東京大会に集結・発表し、世界中の環境状況、取り組み、可能性を議論する。これによって日本の環境への総合的取り組みを世界にアピールし、世界の環境意識をリードすることができる。

(2)具体的な施策

1. 全国10箇所程度の市区町村を対象に行う、環境理想都市シミュレーションモデルプロジェクト
都市部、密集地区、郊外、里地里山、地方都市、農村等、寒冷地からモンスーン地域まで
2. 構想立案専門家チーム派遣(環境建築、都市計画、造園、環境工学、環境社会学、法律、経済・コスト分析等)
3. シミュレーション対象:景観、物質循環、エネルギー(需要、供給、LCCO2履歴)、社会システム(法体系、税制、行政制度、コミュニティシステム、行政組織等)、経済・流通システム
4. 環境配慮計画シミュレーション内容例:現状環境検証、改修方法発案、アーバンデザイン手法提案、環境配慮障害要因検証、改修・改築コスト分析、省エネ効果分析等 総合的に行う。
5. 改修を主とする。改築・新築においては次世代省エネ対応への監修・指導を行う。
6. 改修対象:インフラ、公共都市空間、ランドスケープ、公共施設、民間施設(業務施設、住宅施設等)
7. 2008年世界サミットにて世界各地の研究提案。2011年UIA(国際建築家連合)東京大会へ集結・発表。

(3)ねらい 何を変えるとどうパラダイムを変えられるか

1. 現行の法、制度、組織などの社会システムのどの点が障害となり、緩和措置を講じるとどのような効果があるか
3. ディベロッパー、建設会社、消費者に対するインセンティブは、どのような効果があるか
4. どのような省エネ手法・環境要素技術、自然・循環・バイオエネルギーの可能性があるか
6. CO2の履歴をどのように調べ(トレーサビリティ)、表現し(PR,エコラベリング)、将来計画を立てるのが効果的か
7. どのようなライフスタイルが今後考えられるか
8. どのようなプロセス、検討組織、主体が今後進めていく方法か
9. 構想立案チーム、専門家はどのような資質・資格が必要か
10. 金融、証券、保険等のファイナンスの可能性は
11. 土地・建物に関してどのような所有・管理形態が理想か
12. 景観整備の手法、公開空地等公共と民間との関係はどうあるべきか
13. 日本におけるコンパクトシティのプロセスはどう行うべきか
14. 今後の自然共生システムの可能性はどうあるべきか 等